

漢語近世音と契丹文字漢字音(2)
—契丹小字の入声表記、-t/-kの有無—

吉池孝一 中村雅之

近世音の位置づけ

吉池：鄭再發(1966)¹は我々の言う近世音を“近古”音とし、近古を3期に分け、近古早期を10世紀初期～12世紀初期とします。この時期は、北宋(960-1127年)を念頭に置いたもので、遼(916-1125)の音韻資料は念頭にはないでしょう。今回我々は遼の契丹文字で表記された漢語音に拠って近世音の初期(鄭氏の近古早期に当たる漢語音)を確認するわけですが、北宋の首都である開封(汴京)一帯の漢人の言語音と、遼の燕雲地域(北京と大同を含む河北北部と山西北部一帯)の契丹人が話す漢語音についてどのように考えますか。いずれも北方の漢語音には違いないのですが。

中村：鄭氏の提示した分類は漢語音韻史を一つの線でつなげるという伝統的なやり方ですが、前回見た聶鴻音(1990)²のように地域差を考慮する観点も必要です。私は北京こそが近世音の発信源だと考えていますから、契丹文字資料は中核をなすものだと思います。契丹文字資料は中古音の枠組みとはかなり異なる部分があり、近世音(あるいは近古音)としてそれ以前の資料と区別する必要のあるものです。作業としては、契丹文字資料の検討をした後で他の地域の資料と比較して、10-12世紀の北方の状況を検討するというところでよいのではないのでしょうか。

吉池：北宋の首都である開封(汴京)一帯の漢人の漢語音は中古音との繋がりで捉えることはできるが、遼の燕雲地域(北京と大同を含む河北北部と山西北部一帯)の契丹人の漢語音とは直接に繋がるものではない。後者は現代北京語に繋がるものとして捉えることができると考え、契丹文字で表記された漢語音を優先的に検討するというわけですね。

契丹文字資料

中村：検討に当たってまずは使用する契丹文字の資料を年代順に並べてもらえますか。

吉池：劉鳳翥(2014)³は契丹文字の石刻文(墓誌、哀冊)拓本を遼金にわたりほぼ網羅して収

¹ 鄭再發(1966)「漢語音韻史的分期問題」『中央研究院歷史語言研究所集刊』36、635-648頁。

² 聶鴻音(1990)「近古漢語北方話的内部語音差異」『北京師範大学学術』増刊『學術之声』。

³ 劉鳳翥(2014)『契丹文字研究類編 第一冊～第四冊』北京：中華書局。

めるのでそれに拠ります。

遼 (916—1125)

契丹大字公布

神册 5 年 (920)

契丹小字公布

天贊 3 年 (924) か天贊 4 年 (925)

| | | | |
|--------|--------------------------|----------------|----------|
| 契丹大字 | 耶律延寧墓誌銘 | 統和 4 年 (986) | 1964 年出土 |
| 契丹大字 | 北大王墓誌銘 | 重熙 10 年 (1041) | 1975 年発見 |
| 契丹小字 | 耶律宗教墓誌銘 | 重熙 22 年 (1053) | 1991 年出土 |
| * 契丹小字 | 遼興宗皇帝哀册手抄本 | 清寧 1 年 (1055) | 1922 年出土 |
| * 契丹小字 | 蕭高寧・富留太師墓誌銘 ^注 | 清寧 3 年 (1057) | 1950 年出土 |

注：『契丹小字研究』は蕭令公墓誌とする。

| | | | |
|--------|-------------------|----------------|----------|
| 契丹大字 | 耶律昌允墓誌銘 | 清寧 8 年 (1062) | 2000 年出土 |
| 契丹小字 | 蕭奮勿膩・圖古辭墓誌銘 | 咸雍 4 年 (1068) | 2000 年出土 |
| 契丹小字 | 耶律仁先墓誌銘 | 咸雍 8 年 (1072) | 1983 年出土 |
| * 契丹小字 | 仁懿皇后哀册文手抄本 | 大康 2 年 (1076) | 1922 年出土 |
| 契丹小字 | 耶律 (韓) 高十墓誌銘 | 大康 2 年以後 | 1995 頃出土 |
| 契丹小字 | 蕭特每・闊哥駙馬第二夫人韓氏墓誌銘 | 大康 4 年 (1078) | 出土時不詳 |
| 契丹大字 | 多羅里本墓誌銘 | 大康 7 年 (1081) | 出土時不詳 |
| 契丹小字 | 耶律兀里本・慈特墓誌銘 | 大康 8 年 (1082) | 1997 年出土 |
| 契丹小字 | 耶律永寧郎君墓誌銘 | 大安 4 年 (1088) | 1995 年出土 |
| 契丹大字 | 蕭孝忠墓誌銘 | 大安 5 年 (1089) | 1951 年出土 |
| 契丹大字 | 蕭袍魯墓誌銘 | 大安 6 年 (1090) | 1965 年出土 |
| 契丹大字 | 永寧郡公主墓誌銘 | 大安 8 年 (1092) | 2002 年出土 |
| 契丹小字 | 耶律迪烈墓誌銘 | 大安 8 年 (1092) | 出土時不詳 |
| 契丹小字 | 耶律智先墓誌銘 | 大安 10 年 (1094) | 1998 年出土 |
| 契丹小字 | 蕭太山和永清公主墓誌銘 | 壽昌 1 年 (1095) | 2003 年出土 |
| 契丹小字 | 耶律奴墓誌銘 | 壽昌 5 年 (1099) | 1999 年出土 |
| 契丹小字 | 耶律弘用墓誌銘 | 壽昌 6 年 (1100) | 1996 年出土 |
| 契丹小字 | 撒懶・室魯太師墓誌銘 | 壽昌 6 年 (1100) | 2000 年出土 |
| 契丹小字 | 耶律 (韓) 迪烈墓誌銘 | 乾統 1 年 (1101) | 1996 年出土 |
| * 契丹小字 | 道宗皇帝哀册 | 乾統 1 年 (1101) | 1930 年出土 |
| * 契丹小字 | 宣懿皇后哀册 | 乾統 1 年 (1101) | 1930 年出土 |
| 契丹小字 | 耶律副部署墓誌銘 | 乾統 2 年 (1102) | 1996 年出土 |
| 契丹小字 | 耶律貴安・迪里姑墓誌銘 | 乾統 2 年 (1102) | 出土時不詳 |
| * 契丹小字 | 許王墓誌 | 乾統 5 年 (1105) | 1975 年出土 |
| 契丹小字 | 梁國王墓誌銘 | 乾統 7 年 (1107) | 2001 年出土 |
| 契丹大字 | 耶律朮墓誌銘 | 乾統 8 年 (1108) | 1993 年出土 |

| | | | |
|-------------|-------------|----------------|----------|
| 契丹小字 | 澤州刺史墓誌銘殘石 | 乾統 8 年 (1108) | 1994 年出土 |
| 契丹小字 | 義和仁壽皇太叔祖哀册文 | 乾統 10 年 (1110) | 1997 年出土 |
| 契丹小字 | 宋魏國妃蕭氏墓誌銘 | 乾統 10 年 (1110) | 1997 年出土 |
| 契丹大字 | 耶律習細墓誌銘 | 天慶 4 年 (1114) | 1987 年出土 |
| * 契丹小字 | 故耶律氏銘石 | 天慶 5 年 (1115) | 1969 年出土 |

金 (1115—1234)

| | | | |
|--------------------|--------------|----------------|----------|
| 女真大字公布 | | 天輔 3 年 (1119) | |
| * 契丹小字 | 大金皇弟都統經略郎君行記 | 天會 12 年 (1134) | 伝世資料 |
| 女真小字公布 | | 天眷 1 年 (1138) | |
| * 契丹小字 | 蕭仲恭墓誌銘 | 天德 2 年 (1150) | 1942 年出土 |
| 契丹小字 | 金代博州防禦使墓誌銘 | 大定 10 年 (1170) | 1993 年出土 |
| 契丹小字 | 蕭居士墓誌銘 | 大定 15 年 (1175) | 2004 年出土 |
| 契丹大字 | 李愛郎君墓誌銘 | 大定 16 年 (1176) | 出土時不詳 |
| 契丹文字使用禁止の発令 | | 明昌 2 年 (1191) | |

中村：契丹小字の公布は天贊 3 年 (924) か天贊 4 年 (925) ですが、今のところ早い資料は遼興宗皇帝哀册手抄本 (清寧 1 年 (1055)) なので、近世音初期 (10-12 世紀) の検討と言っても実際には 11 世紀中ごろ以降となりますね。金代にも契丹文字資料があるのでこれも検討の対象です。契丹大字資料と契丹小字資料があるが、とりあえずは表音文字主体とされる契丹小字資料の検討に絞りましょう。

吉池：契丹小字文のなかに漢語の役職名や地名が大量に出てきます。それを体系的に分析した嚆矢として『契丹小字研究』(1985)⁴があるので、先ずはその研究成果によることにしませんか。『契丹小字研究』で使用された石刻文は*を付した 9 種です。

中村：列挙した契丹文字石刻文を見ると、近年の出土に関わる資料が目につきます。『契丹小字研究』(1985)に拠るばかり、一部の資料のみの検討になりますが、期を画する研究でもあるので、当該書の研究成果から始めることに異存はありません。なお、入声韻尾の有無は近世音の初期を特徴づける一つとされるので、入声韻尾から検討するということでしたね。

『契丹小字研究』の入声字一覧

吉池：『契丹小字研究』(1985)の「契丹原字音値構擬表第一」(81-109 頁)には契丹小字と対応する入声字が提示されています。以下が入声字のすべてです。契丹小字の末尾の原字によって配列したものです。なお、表中の三種の漢字音の音価ですが、『契丹小字研究』には

⁴ 清格爾泰、劉鳳翥等著(1985)『契丹小字研究』北京：中国社会科学出版社。

喻世長氏の意見に拠ったとあります⁵。宋代音の根拠は不明ですがそのまま引用します。

| 原字 | 小字 | 音訳漢字 | 切韻 | 宋代音 | 中原音韻 | 原字の推定音 |
|----------|-------|------|-------|-------|-------|--------|
| 7 𠂔 | 𠂔 | 漆 | ts'it | ts'i? | ts'i | i |
| | 𠂔 | 密 | mit | mi? | mi | |
| | 𠂔 | 尉 | ?iot | ?uei | ui | |
| | 𠂔 | 室 | ʃit | ʃi? | ʃi | |
| 12 𠂔 | 𠂔 | 職 | ʃiək | ʃi? | ʃi | tʃi |
| 19 𠂔 | 𠂔 | 國 | kuək | kuei? | kuei | uei |
| 28 𠂔 | 𠂔 | 洛 | lək | la? | lau | u |
| | 𠂔 | 略 | liək | lia? | liau | |
| 55 𠂔 | 𠂔 | 僕 | b'uk | b'u? | p'u | u |
| | 𠂔 | 祿 | luk | lu? | lu | |
| 61 𠂔 | 𠂔 | 祿 | luk | lu? | lu | lu |
| 62 𠂔 | 𠂔 | 祿 | luk | lu? | lu | lu |
| 63 𠂔 | 𠂔 | 特 | d'ək | d'ei? | t'ei | i |
| | 𠂔 | 德 | tək | tei? | tei | |
| | 𠂔 | 德 | tək | tei? | tei | |
| 64 𠂔 | 𠂔 | 察 | tʃ'ət | tʃ'a? | tʃ'a | tʃ'a |
| 66 𠂔 | 𠂔 | 節 | tset | tsie? | tsie | e |
| 77 𠂔 | 𠂔 | 尉 | ?iot | ?uei | ui | uei |
| 84 余 (𠂔) | 𠂔 (𠂔) | 册 | tʃ'ək | tʃ'a? | tʃ'ai | ai |
| 85 𠂔 | 𠂔 | 伯 | pək | pa? | pai | ai |
| | 𠂔 | 客 | k'ək | k'a? | k'ai | |
| 91 𠂔 | 𠂔 | 月 | ɲiət | ɲua? | ue | ue |
| 92 𠂔 | 𠂔 | 越 | ɣiət | wue? | ue | ue |
| 93 𠂔 | 𠂔 | 越 | ɣiət | wue? | ue | ue |

注：『契丹小字研究』は𠂔余册とする。即實(2012)は、余と𠂔は異体字とする。劉鳳翥編著(2014)は、𠂔余が誤で、𠂔余を正とする。

中村：84 余 (𠂔) は字形に問題がありそうですが、どういうことでしょうか。

余と𠂔について

吉池：余は「哀册文」の「册」の漢字音表記に使われる原字を翻字したものです。注に書い

⁵ 「其中，漢字中古音的擬音採用的的是喻世長先生的意見，這是喻世長先生研究漢語音韻學的最新成果。」(80頁)。ここで言う「中古音」は切韻、宋代音、中原音韻の三者を指す。

たように幾つかの意見があります。いま拓本で原字の字形を確認すると次のとおりです。

| 石刻文名 | 篆蓋銘文 の原字 | 哀冊本文の 原字 | 『契丹小字研究』 (1985)の翻字 | 即實(2012) の翻字 | 劉鳳翥(2014) の翻字 |
|---------------------|---|---|--|-----------------|------------------|
| 道宗皇帝 哀冊 1101年 |  |  行書 | 篆蓋余 本文余 | 篆蓋余 本文余 | 篆蓋余 本文余 |
| 宣懿皇后 哀冊 1101年 |  |  行書 | 篆蓋余 本文余 | 篆蓋余 本文余 | 篆蓋余 本文余 |
| 皇太叔祖 哀冊 1110年 |  |  楷書。右が 当該の原字 | ナシ。『契丹小字研究』 (1985)出版後の1997年 の出土。 | 篆蓋余 本文余 | 篆蓋余 本文余 |

中村：本文の字形はいずれも余に近いですね。『契丹小字研究』(1985)は篆蓋の篆書の字形に拠って余と翻字したのでしょうか。皇太叔祖哀冊は篆書も本文の楷書も明らかに余です。皇太叔祖哀冊の出土(1997年)を契機として、これまでの字形の同定について反省が加えられたのでしょうか。

吉池：即實(2012)⁶は余と余は異体字とします⁷。劉鳳翥(2014)は、余余は誤りで余余が正しいとし⁸、篆蓋銘文のも余と翻字するわけですが、その根拠は明示しません。いま漢字楷書の「ㄣ」と「ㄞ」に対応する小篆を宋・徐鍇撰『説文解字徐氏繫傳四十卷』⁹の影印で確認すると次のとおりです。



「ㄣ」の小篆は屋根の最上部が突き出ており屋根も丸みを帯びています。「ㄞ」の最上部は突き出ることがなく屋根は直線的で、これによると、契丹小字余の篆書体は漢字の小篆に

⁶ 即實(2012)『謎田耕耘：契丹小字解讀續』瀋陽：遼寧民族出版社。

⁷ 「抄本(『契丹小字資料彙輯』：対談者注記)之余，拓本作余。據冊蓋篆書還楷須作余。由此可知，余余是異體同字。」(《道宗哀冊》校勘記766頁)。

⁸ 劉鳳翥編著(2014)第二冊「契丹小字《道宗皇帝哀冊》和《宣懿皇后哀冊》是行書體，規範爲楷體字有一定的難度。二十世紀七十年代，契丹文字研究小組把契丹小字「哀冊」和「冊文」的「冊」規範爲余余。由於契丹小字《皇太叔祖哀冊》的出土和發表，使我們得知規範爲余余是不對的，契丹小字「哀冊」的「冊」爲余余。」(487頁)。

⁹ 『説文繫傳(一)(二)』臺北：華文書局1971年、清道光十九年祁刻本影印。

拠ったものと見て良いのでしょうか。𠂔の屋根の部分は、𠂔の「㇇」を漢字の小篆に拠って篆書化したもので、「㇇」の篆書ではありません。したがって、𠂔と𠂔を異体字とする即實(2012)は誤りです。

中村：『契丹小字研究』(1985)の𠂔余冊は、𠂔余冊の誤ということですね。ところで、契丹小字の原字（音節や語の構成要素）の音の推定に於いて、切韻（中古音）、宋代音、中原音韻（近世音）のみで決定することはできません。入声韻尾の有無の決定に当っては、韻尾に相当する原字を、入声以外の漢字音に対してどのように利用しているか、ひとつずつ確認する必要があります。

『契丹小字研究』の入声字検討

吉池：先ず7 𠂔から 63 𠂔までザッと見ます。理解の便宜のため漢字の後には『契丹小字研究』(1985)で採用されている中古音と近世音を付し、中古音>近世音とします。

7 𠂔 𠂔漆 ts'it>ts'i、𠂔 𠂔密 mit>mi、𠂔 𠂔尉 ʔiot>ui、𠂔 𠂔室 ʃit>ʃi。『契丹小字研究』によると、𠂔 𠂔漆は𠂔 𠂔西 si と同表記。また𠂔には𠂔 𠂔懿 i という用法がある。以上により𠂔 𠂔漆・𠂔 𠂔密・𠂔 𠂔尉・𠂔 𠂔室に入声韻尾-t は無いと推定する。

12 𠂔 𠂔職 ʃiak>ʃi。『契丹小字研究』によると、𠂔 𠂔用政 tʂəŋ/ʃiŋ・𠂔 𠂔用鄭 tʂəŋ/ʃiŋ とあり 声母に使用される。なお𠂔は𠂔 𠂔應 iŋ の表記に使用する。以上により𠂔 𠂔職に入声韻尾-k は無いと推定する。

19 𠂔 𠂔國 kuək>kuei。𠂔 𠂔圭 kuei と同表記なので、𠂔 𠂔國に入声韻尾-k は無いと推定する。

28 𠂔 𠂔𠂔洛 lak>lau、𠂔 𠂔𠂔𠂔略 liək>liau。𠂔 𠂔𠂔𠂔略 liau は、𠂔 𠂔𠂔𠂔少 ʃeu と韻母部分が同表記なので、𠂔 𠂔𠂔𠂔洛と𠂔 𠂔𠂔𠂔略に入声韻尾-k は無いと推定する。

55 𠂔 𠂔𠂔僕 b'uk> p'u、𠂔 𠂔𠂔祿 luk>lu。𠂔は𠂔 𠂔𠂔武 vu の表記に使用されるので、𠂔 𠂔𠂔僕と𠂔 𠂔𠂔祿に入声韻尾-k は無いと推定したいところであるが、𠂔 𠂔𠂔武には問題がある。

『契丹小字研究』(1985)は、契丹小字で漢字音「武」を表記する例を4つ挙げる¹⁰。拓本に拠って字形を確認すると次のとおり。

| 武を含む漢語 語彙 | 資料名 | 武の拓本 影印 | 契丹小字の翻字 | | |
|--------------|-----|------------|---------|----------------|-----------|
| | | | 『研究』 | 即實(1996)(2012) | 劉鳳翥(2014) |
| | | | | | |

¹⁰ この議論と直接係わるものではないが文献の訂正をする。『契丹小字研究』(1985)は𠂔 𠂔と𠂔 𠂔を区別する。しかし70頁の表では、𠂔 𠂔の見出しの下に𠂔 𠂔に相当する資料名を挙げて両者を区別しない。これは文献内部の齟齬である。

| | | | | | | |
|---|-------|------------------|---|---|---|---|
| ① | 武騎尉 | 道宗皇帝哀册 册2行23字 |  | 𠂔 | 𠂔 | 𠂔 |
| ② | 武騎尉 | 宣懿皇后哀册 册2行27字 |  | 𠂔 | 𠂔 | 𠂔 |
| ③ | 武清 | 故耶律氏銘石 石11行5字 |  | 𠂔 | 𠂔 | 𠂔 |
| ④ | 昭武大將軍 | 蕭仲恭墓誌 27行10 |  | 𠂔 | 𠂔 | 𠂔 |

*①②④の拓本は『契丹小字研究』(1985)により、③の拓本は劉鳳翥(2014)第四冊に拠る。

*『契丹小字研究』(1985)「契丹小字詞語釋讀表」(122頁)で武を𠂔と翻字する。

*劉鳳翥(2014)の𠂔は「契丹小字《蕭仲恭墓誌銘》再考釋」(285頁)の翻字に拠る。

𠂔と𠂔の識別について、即實(1996)は結論のみ述べるが即實(2012)は「拓本によると上部の横線は非常に短いけれども𠂔であり𠂔とするのは誤り」とする¹¹。劉鳳翥(2014)は𠂔とすることについて何も述べない。拓本の影印を見る限り、𠂔と𠂔の識別は𠂔の上部“フ”の短い横線の有無に拠ると見て良い。資料が異なると刻工などの手も異なり字形も微妙に変化するの、同じ資料の中での𠂔と𠂔を確認する。蕭仲恭墓誌の武27-10の右の原字を、仮に𠂔として表示すると次のようになる。道宗皇帝哀册、宣懿皇后哀册、蕭仲恭墓誌は『契丹小字研究』(1985)掲載の拓本に拠り、故耶律氏銘石は劉鳳翥(2014)第四冊の拓本に拠った。

| 資料名 | 𠂔の拓本陰影 | 𠂔の拓本陰影 |
|--------|---|--|
| 道宗皇帝哀册 |  武(2-23) |  祿(2-10) |
| 宣懿皇后哀册 |  武(2-27) |  祿(2-10) |
| 故耶律氏銘石 |  武(11-5) |  祿(2-9)  僕(2-17) |
| 蕭仲恭墓誌 |  副(8-7)  武(27-10) |  契丹語(右上原字)(9-33) |

蕭仲恭墓誌武(27-10)の右原字は、字形のみから見るならば𠂔とも𠂔とも判断し難い。劉浦江・康鵬(2014:99)¹²に拠ると、武の用例は上の4例を含め11例ある。11例を調査すると、8例は𠂔、2例は𠂔であるか𠂔であるか識別が困難、1例は不鮮明なため確認できない

¹¹ 「𠂔，抄本【『契丹小字資料彙輯』契丹文研究小組油印：対談者未見】作𠂔，誤。拓本作𠂔，上端横劃太短。這是音寫昭武，武沒有韻尾[kʰ]音，不能用𠂔」(1037頁)。この短文の後半は、𠂔を[ku]とする即實氏の論にもとづく発言。

¹² 劉浦江・康鵬(2014)『契丹小字詞彙索引』北京：中華書局。

13. 武𠂔𠂔が通常の表記であるのは見て取れる。武𠂔𠂔を排除して武𠂔𠂔とするためには余程の根拠が必要となるが、そのようなものは認められない。したがって判定困難な2例は共に武𠂔𠂔とするのが穏当であり、武𠂔𠂔を根拠として𠂔の音をuとすることはできない。𠂔𠂔武を利用できないとなると、『契丹小字研究』(1985)で扱う漢語音資料の範囲内で𠂔𠂔僕、𠂔𠂔祿の入声韻尾-kの有無に言及することはできない。

61 𠂔祿 luk>lu と 62 𠂔祿 luk>lu。55 𠂔𠂔祿、61 𠂔祿、62 𠂔祿の用例を資料の年代で並べると次のとおり。

遼代

- 龍𠂔 (興宗皇帝哀册 清寧1年(1055)4行1字目)
- 龍𠂔 (興宗皇帝哀册 清寧1年(1055)8行3字目)
- 辰𠂔年三月丙辰𠂔朔六日 (仁懿皇后哀册 大康2年(1076)11行13字目)
- 龍𠂔 (道宗皇帝哀册 乾統1年(1101)7行10字目)
- 黑龍𠂔 (宣懿皇后哀册 乾統1年(1101)26行12字目)
- 銀青崇祿𠂔𠂔大夫 (道宗皇帝哀册 乾統1年(1101)2行10字目)
- 銀青崇祿𠂔𠂔大夫 (宣懿皇后哀册 乾統1年(1101)2行10字目)
- 金紫崇祿𠂔𠂔大夫 (故耶律氏銘石 天慶5年(1115)2行9字目)

金代

- 銀青光祿𠂔大夫蕭 (蕭仲恭墓誌銘 天德2年(1150)21行4字目)
- 龍𠂔顔 (蕭仲恭墓誌銘 天德2年(1150)24行17字目)

単独の龍𠂔や二語の黒龍𠂔・龍𠂔顔は、読みとして“危うい”が仮に認めるとする。点のある𠂔は1例のみ。仁懿皇后哀册の辰𠂔年三月丙辰𠂔朔六日の最初の辰であり、同じ辰が𠂔として同行に出てくる。仁懿皇后哀册は原石も拓本もなく手抄本のみであり、不正確な手抄本であるとされる。𠂔は𠂔の誤写と見て良い。遼代では十二支の辰(龍)𠂔と祿𠂔𠂔を表記し分ける。金代では辰(龍)と祿を共に𠂔で表記するのは同音であったためであろう。以上により𠂔で表記される金代の祿に入声韻尾-kは無いと推定する。

63 𠂔𠂔特 d'ək>t'ei、𠂔𠂔德 tək>tei、𠂔𠂔德 tək>tei。𠂔を音節末に持つ例はないが、𠂔𠂔

13 ①耶律迪烈墓誌。武安(18-13)𠂔𠂔。②耶律智先墓誌。文武之(3-18)𠂔𠂔 (上部の横線が見えない)。③道宗皇帝哀册。武騎尉(2-23)𠂔𠂔。④宣懿皇后哀册。武騎尉(2-27)𠂔𠂔。⑤故耶律氏銘石。武清(11-5)𠂔𠂔。⑥金代博州防禦使墓誌。昭武大將軍(23-6) (不鮮明なため確認できない)。⑦金代博州防禦使墓誌。宣武將軍(39-12)𠂔𠂔。⑧蕭居士墓誌銘。故顯武將軍(誌蓋1-3)𠂔𠂔。⑨蕭居士墓誌銘。故顯武將軍(1-5)𠂔𠂔。⑩蕭居士墓誌銘。顯武將軍(14-49)𠂔𠂔。⑪蕭仲恭墓誌。昭武大將軍(27-10)𠂔𠂔又は𠂔𠂔。

𠬞右 iou、𠬞𠬞𠬞右 iou のように音節初頭の i に相当する用法がある。以上により 𠬞𠬞特、𠬞𠬞德、𠬞𠬞德に入声韻尾-k は無いと推定する。

中村：7 から 28、61 から 63 の入声字に韻尾-t, -k を想定せず、55 𠬞𠬞僕と𠬞𠬞祿については継続して検討する必要があるということに異論はありません。64 𠬞から 93 𠬞は次のとおりです。

64 𠬞察 tɕ'ət > tɕ'a。𠬞については、𠬞𠬞尚 ɣaŋ / ʃiaŋ¹⁴と 𠬞𠬞𠬞・長 tɕ'an / ʃ'an のように音節の前半部分を表記する用法がある。𠬞察に入声韻尾-t は無い。

66 𠬞文節 tset > tsie。韻母を同じくする 𠬞文射 ie がある。𠬞文節に入声韻尾-t は無い。

77 𠬞尉 ʔiot > ui。尉には 7 𠬞𠬞尉という表記もある。𠬞は 𠬞𠬞懿 i のように使用される。𠬞尉に入声韻尾-t は無い。

84 𠬞𠬞 (𠬞𠬞とはしない) 𠬞 tɕ'ek > tɕ'ai。次項を参照。

85 𠬞𠬞伯 pak > pai、𠬞𠬞客 k'ak > k'ai。𠬞の用例は上の 84 𠬞𠬞𠬞と合わせて三種のみ。『契丹小字研究』で扱う漢語音資料の範囲内で入声韻尾-k の有無に言及できない。

91 𠬞月 ɲiot > ue。𠬞は、音節の前部に使った 𠬞𠬞越があるので、入声韻尾-t は考えにくい。

92 𠬞𠬞越 ɣiot > ue と 93 𠬞𠬞越 ɣiot > ue。𠬞𠬞越と 𠬞𠬞越の用例は次のとおり。

𠬞𠬞越

遼代

越 𠬞𠬞國王之 (許王墓誌 乾統 5 年 (1105) 50 行 8 字目)

金代

越 𠬞𠬞國王 (蕭仲恭墓誌銘 天德 2 年 (1150) 誌蓋 2 行 1 字目)

越 𠬞𠬞國王之 (蕭仲恭墓誌銘 天德 2 年 (1150) 1 行 5 字目)

越 𠬞𠬞國公主之 (蕭仲恭墓誌銘 天德 2 年 (1150) 5 行 7 字目)

𠬞𠬞越

¹⁴ 長田夏樹(1984 ; 2001)「契丹語解読方法論序説」『内陸アジア言語の研究 I』神戸外国語大学、長田夏樹(2001)『長田夏樹論述集 (下) 漢字文化圏と比較言語学』京都：ナカニシヤ出版所収 634-687 頁の 680 頁で、尚書の尚は ʃaŋ ではなく ʃ'an であるとする。この点について、長田夏樹(1991 ; 2001)「契丹漢字音探源 一契丹小字によって表記された漢字音の音価とその体系について一」『長田夏樹論述集 (下) 漢字文化圏と比較言語学』京都：ナカニシヤ出版所収、724-737 頁の 730-732 頁に詳細な言及がある。

吉池：戈也昆墓誌（蕭仲恭墓誌）¹⁹の4-5行目を、即實氏は祖先を記述したものとして次のように読みます。

𡗗-𡗗𡗗-𡗗𡗗出-𡗗-𡗗𡗗𡗗-𡗗𡗗伏-𡗗𡗗𡗗-𡗗-𡗗𡗗

大 王 の 子 (複数) 二 第 一 名 名 駙 馬

大王の子二人。長子の名は古魯訥・徳思魂で（役職は）駙馬。

長子の名𡗗𡗗伏-𡗗𡗗𡗗（古魯訥・徳思魂。なお即實(1996)は𡗗を sə とするが即實(2012)²⁰は mə に訂正するので徳思魂という音訳は成立しない）を、墓主・蕭仲恭の父の名とします。この𡗗𡗗伏に『契丹小字研究』（1985）の原字推定音（152-153 頁）を当てはめると𡗗 u 𡗗 ul 伏 nə 「uulnə」となるのですが、即實氏は [ku:lnə]²¹ と読み、『遼史』卷九十八「蕭兀納傳」の「兀納」に相当するとします。『契丹小字研究』（1985）との違いは𡗗を u とするかそれとも ku とするかです。即實氏は𡗗𡗗伏 [ku:lnə] と読む根拠を四つ挙げます。

- ① 音訳語兀納の兀は唐宋音で [ku] に近い。
- ② 𡗗は漢字「各」（声母は見母 k-）の上部から作られたと想定し得るから各の音に近い。
- ③ 𡗗は唐宋音僕 [puk’]、祿 [luk’]²²の表記に使用するから k 音を含む。
- ④ 武は𡗗𡗗であり𡗗𡗗ではない。𡗗を u とする根拠にはならない。

以上により𡗗の音を u ではなく [ku] とします。（以上趣意）

このようにして𡗗 ku を認めることができるならば、僕と祿の契丹小字の表記は𡗗を含むため、僕と祿に入声韻尾-k を想定することになります。

下文是𡗗-𡗗𡗗-𡗗𡗗出-𡗗-𡗗𡗗𡗗-𡗗𡗗伏-𡗗𡗗𡗗-𡗗-𡗗𡗗，我已解爲“大王有子二人，長兀納一徳思魂駙馬”。首二詞大王，指前文之撻不也。王字附有領屬格助詞。第三詞義爲子，是複数。第四詞義是共二，與子之複数相照應。第五詞義爲第一，可譯爲孟伯長。第六詞是人名，依字音應寫成古魯訥，爲避免歷史學家的麻煩，茲從《遼史》作兀納。𡗗字，《研究》【『契丹小字研究』——対談者注】讀爲 [u]，所據例字是僕祿武。僕，唐宋音爲 [puk’]，故綴作𡗗𡗗或𡗗𡗗。祿，唐宋音爲 [luk’]，故綴作𡗗𡗗。武，綴作𡗗𡗗，而不作𡗗𡗗。由此可證，𡗗必有

¹⁹ 即實氏の資料の命名は独特である。この戈也昆墓誌、ふつうには蕭仲恭墓誌と称される。金・天徳2年(1150)、1942年出土。なお、即實(2012)『謎田耕耘：契丹小字解讀續』瀋陽：遼寧民族出版社では、戈也昆墓誌を戈里衍墓誌に訂正する。

²⁰ 即實(2012)「新擬改擬字音表」『謎田耕耘：契丹小字解讀續』瀋陽：遼寧民族出版社、350頁。

²¹ 即實(1996)は「解讀總表・擬音表」440-446頁原字で、破裂音・破擦音を t と t’、k と k’、ʃ と ʃ’などと表記する。これは契丹語の破裂音・破擦音の対立を無声無気音と無声有気音する立場からの表記と見なし得る。その他に、d と t、g と k のように有声音と無声音の対立とする立場、軟音 d~ḍ と硬音 k~k’の対立とする立場がある。立場によっては、k は g に相当するので、[gu:lnə] としても良い。

²² [puk’] [luk’] 並母を p とすることから見て中古音以降の音を想定したものか。なお、ふつう入声韻尾は内破音-k とするが有気音の k’ とある。k’ とした意図は不明であるがそのまま引用する。

輔音 [k]。再從字形判斷，當是截取“各”字上半而制，是讀爲 [ku] 正與其聲相應。本誌與《銘石》【契丹小字碑文「故耶律氏銘石」を指す——対談者注】人名又證實讀 [ku] 恰合《遼史》之記載。第七詞，亦是人名，可近似地記爲德思魂，義又爲叙衡，前解之 **𐰺𐰽𐰸** 亦同。末二詞是駙馬，《研究》已經解讀。

認定 **𐰺𐰽𐰸** 卽是《遼史》有傳之蕭兀納 根據有如下幾點。一是名字相同。 **𐰺𐰽𐰸** 讀 [ku:lŋə]。兀，唐宋音近 [ku]，與 [ku:l] 相較只差尾輔音 [l]，可視爲譯音失真。這種情況很多。比如 [ʃulusen] 譯爲女眞，[ʃuluso] 譯爲術者，《遼史》均有例證。[ŋə] 與納，亦是記音不準。故可斷定，兀納卽是 **𐰺𐰽𐰸** 之音譯，只是不{多+句}準確。【以下省略する】 (102-103 頁)

中村：④ **𐰺𐰽𐰸** ではなく **𐰺𐰽𐰸** であるということについては、先に確認しました。議論の前提となる“蕭兀納は蕭仲恭の父 **𐰺𐰽𐰸** である”という点は、確実なのでしょうか。

吉池：戈也昆墓誌（蕭仲恭墓誌）中の、墓主（蕭仲恭）の祖父と父の記述は次のとおりです。

2 行目祖父の名 **𐰺-𐰽-𐰺𐰽𐰸-𐰺𐰽𐰸-𐰺𐰽𐰸-𐰺𐰽𐰸**
 祖父 名 名 大王
 （祖父は **𐰺𐰽𐰸**・**𐰺𐰽𐰸** 大王。）

4-5 行目父の名 **𐰺-𐰽𐰸-𐰺𐰽𐰸-𐰺𐰽𐰸-𐰺𐰽𐰸-𐰺𐰽𐰸-𐰺𐰽𐰸-𐰺𐰽𐰸**
 大王の子(複数) 二 第一 名 名 駙馬
 （大王の子二人。長子の名は **𐰺𐰽𐰸**・**𐰺𐰽𐰸** で（役職は）駙馬。）

中村：祖父と父の契丹語名の音はどのようなものでしょう。

吉池：即實(1996)の「擬音表」は網羅的でないので、劉鳳翥(2014)²³に拠ります。

祖父の名 **𐰺 t 𐰽 mə 𐰽 an** ・ **𐰺 t/th 𐰽 apu 𐰽 i/jia 𐰽 li**
 父の名 **𐰺 u** (即實氏は ku とする) **𐰽 ul 𐰽 ni** ・ **𐰺 t 𐰽 mə 𐰽 li**

戈也昆墓誌（蕭仲恭墓誌）の墓主が『金史』卷八十二「蕭仲恭列傳」の蕭仲恭であることは王靜如(1973 ; 2005)²⁴が提示し定説となっています²⁵。そこで蕭仲恭列傳を見ると「蕭仲恭本名朮里者。祖撻不也，仕遼爲樞密使，守司徒，封蘭陵郡王。父特末，爲中書令守司空。」とあり、祖父の名は撻不也、父の名は特末とあります。これに拠ると、撻不也は祖父 **𐰺 t/th 𐰽 apu 𐰽 i/jia 𐰽 li** の音訳語で、特末は父 **𐰺 t 𐰽 mə 𐰽 li** の音訳語となります。次いで、問題の

²³ 劉鳳翥(2014)第二冊「部分契丹小字的原字音值之構擬」(482-509 頁)。

²⁴ 王靜如(1973 ; 2005)「興隆出土金代契丹文墓誌銘解」『考古』1973 (5)。陳乃雄・包聯群(2005)『契丹小字研究論文選編』呼和浩特：內蒙古人民出版社、142-148 頁所収による。

²⁵ 「蕭仲恭《金史》卷八十二有傳。他死於天德二年，六十一歲，上溯至遼道宗大安六年，恰爲 60 年（公元 1090-1150 年），按中國慣例計歲，正是六十一歲。這和墓誌中所記的始年與終年相合。」(148 頁)。

『遼史』卷九十八「蕭兀納列傳」を見ると「蕭兀納一名撻不也，字特免，六院部人。」とあります。蕭兀納の契丹語名は撻不也と特免です。契丹語名には幼名と第二名と、フルネーム（第二名＋幼名）の三つあることが知られています²⁶。蕭兀納列傳を素直に読めば特免・撻不也は祖父のフルネーム（*ᡤ t ᡤ mᡑ 当 an · 令 t/th ᡤ apu 兀 i/jia ᡤ li*）に相当します。劉鳳翥(2014)第三冊「契丹小字蕭仲恭墓誌」991頁は、*ᡤ t ᡤ mᡑ 当 an*（特免）・*令 t/th ᡤ apu 兀 i/jia ᡤ li*（撻不也）という音訳漢字の当て方をするので、蕭兀納（特免・撻不也）を、蕭仲恭の父ではなく、祖父と見ているのでしょう。

しかし、祖父の幼名を撻不也、第二名を特免とすると、兀納という契丹語名の出所をどこに求めるかという問題が生じます。即實(1996)は、蕭兀納列傳の記述「蕭兀納一名撻不也，字特免，六院部人。」には誤りがあるとします。「一名撻不也」は「父撻不也」の誤であると言うのです²⁷。この想定が正しいとするならば、蕭兀納列傳の記述は「蕭兀納，父撻不也，字特免，六院部人。」であったこととなります。蕭兀納の父は撻不也となり、蕭兀納自身の名は兀納と特免となります。そして兀納・特免を、戈也昆墓誌（蕭仲恭墓誌）の墓主蕭仲恭の父のフルネーム、*ᡤ u*（即實氏は *ku* とする）*平 ul 伏 ni*（兀納）・*ᡤ t ᡤ mᡑ ᡤ li*（特免）と理解することができます。

中村：綱渡りのような想定ですが、仮に兀納が*ᡤ 平 伏*の音訳であることを認めるとして議論を進めてみましょう。音訳漢字の兀納が①～④の内、どのような漢字音に基づいて作られたかということが問題になります。②の『皇極經世書』（11世紀）では、疑母字が清土「五瓦仰口」（全て上声）と濁石「吾牙月堯」（上声以外）の二カ所にまとめて配されていることから見て、中古音と同様に疑母は独立しており *ŋ* を想定して特段の不都合はありません。問題は③の燕雲一帯の音（11-12世紀）です。*ŋu* もしくは *u* なのでしょうが、契丹小字で疑母はどの様に表記されますか。

- ① 中古音（切韻 601年）*ŋuət* *音価は藤堂明保(1978)による。
- ② 北宋の首都開封一帯の音（『皇極經世書』11世紀）*ŋu*。
- ③ 燕雲一帯の音（契丹小字表記漢字音 11-12世紀）*ŋu* もしくは *u* か。
- ④ 近世音（『中原音韻』1324年）*u* *音価は藤堂明保(1978)による。

吉池：疑母字を『契丹小字研究』（1985）から拾い出しました。『契丹小字研究』（1985）に付された喻世長氏の切韻、宋代音、中原音韻ですが、疑母の有無の議論にとって特段の不都合は

²⁶ 劉鳳翥(2014)第一冊 279-287頁「契丹小字《蕭仲恭墓誌銘》再考釋」による。「契丹人的契丹語名字有「孩子名」、「第二個名」和「全名」。「全名」是把「孩子名」和「第二個名」重疊在一起，重疊時是把「第二個名」置於「孩子名」之前。「孩子名」和「第二個名」也可以單獨使用。」（280頁）。

²⁷ 即實(1996)「而“一名撻不也”，可能是誤解。以北方各族取名習慣說來，父子不該同名。是則，乃誤父稱為名。也可能是脫文致誤。原文或是“父撻不也”，父字脫，編者誤補為“一名”。」（108-109頁）。

ないと判断しそのまま採用しました。契丹小字の音は劉鳳翥(2014)第二冊「部分契丹小字の原字音値之構擬」(482-509頁)に拠りました。

| 漢語 | 切韻音 | 宋代音 | 契丹小字表記と音 | | 中原音韻 |
|----|------|------|----------------|------|------|
| 儀 | ŋe | ŋi | 𐰺 𐰽 𐰺 i | ŋi | i |
| 御 | ŋio | ŋiu | 𐰺 𐰽 𐰺 iu | ŋiu | iu |
| 吾 | ŋo | ŋu | 𐰺 𐰽 𐰺 u | ŋu | u |
| 銀 | ŋin | ŋin | 𐰺 𐰽 𐰺 in | ŋin | in |
| 元 | ŋion | ŋuen | 𐰺 𐰽 𐰺 iuæ 𐰺 æn | ŋiuæ | uen |
| 元 | ŋion | ŋuen | 𐰺 𐰽 𐰺 iuæ 𐰺 n | ŋiuæ | uen |
| 元 | ŋion | ŋuen | 𐰺 𐰽 𐰺 iuæ 𐰺 n | ŋiuæ | uen |
| 月 | ŋiot | ŋua? | 𐰺 iue | iue | ue |

聖(中原音韻 $\xi\text{əŋ}/\text{ʃiŋ}$) 𐰺 𐰽、丞(中原音韻 $t\text{ʂ}'\text{əŋ}/\text{ʃ}'\text{iŋ}$) 𐰺 𐰽のように𐰺は漢語音の韻尾-ŋを含む音節後半の表記に使われるので、疑母字の音節前半に使われた場合 𐰽-を意図していたとして大過ありません。また、𐰺は越(切韻 γiot 、宋代音 $wue?$ 、中原音韻 ue) 𐰺 𐰽の音節前半に使われるので、月 𐰺は中原音韻のように既に疑母 𐰽は消失していたとして大過ありません。

中村：『中原音韻』では儀(疑母)と移(以母)、御(疑母)と裕(以母)、銀(疑母)と寅(以母)、元(疑母)と員(以母)、月(疑母)と悦(以母)が同音として一まとめにされているので疑母 𐰽は消失していたと見ることができます。なお、「平声陽」において疑母字のみ「吾語鋸蜈[𐰺 𐰽] 吳梧娛颯」として纏められているので疑母 𐰽の有無は判断できません。しかし同韻上声の五(疑母)と塢(影母)、同韻去声の誤(疑母)と惡(影母)が同音なので疑母 𐰽の消失が認められます。平声陽の吾も同様に疑母 𐰽は消失していたとして良いでしょう。それにしても疑母の存否の状況は、契丹小字で表記される漢語音と『中原音韻』とはだいぶ異なりますね。契丹小字表記の月 𐰺の疑母 𐰽の消失がむしろ特殊に見えます。

吉池：𐰺を月の意味で用いる用例は多く、ほぼ「～月～日、正月、日月」の月に相当します。𐰺は、越國の越 𐰺 iue 𐰽 e (iue) の表記にも使用されるので、月の音を表記しているのは確かですが、役職名や地名などの漢語とは異なり、契丹語に取り入れられて久しい常用語と見て良いかもしれません。

中村：月は他の疑母字と質が異なるということですね。問題は、兀が疑母 𐰽を保存していたか否かということです。兀は契丹人の名前として使用しますが、漢語として使用する例は考えにくいので、契丹小字の表記も有りません。しかし吾は 𐰺 𐰽 γu として表記されます。吾と兀は『中原音韻』において共に魚模韻に属す字ですから、兀の契丹小字の表記も吾と同様

に²⁸ 𡗗 ηu であったかもしれませんが。そうすると蕭兀納列傳の兀納は $\eta u n a$ となりますが、モンゴル系の言語とされる契丹語に語頭の η を認めていいのでしょうか。

吉池：モンゴル諸語（中期モンゴル語を含めて）は語頭および音節初頭に軟口蓋鼻音 η はふつう立たないので、契丹語をモンゴル系として良いならば、語頭および音節初頭に η は立たないはずです。契丹人の名の音訳漢字兀納 $\eta u n a$ はどうして成立したかが問題となります。

中村：兀納 $\eta u n a$ という音訳漢字を漢人が作ることはありません。漢語に k -と η -の区別があるので ku を表記するならば孤 ku や古 ku などを利用するはずです。

吉池： ηu という音を持たない契丹人が漢語の ηu 聞いて、それを ku (gu とする立場もある²⁸) と聞き取り ku と発音したということは有り得ることで。契丹人は、漢語音の兀納 $\eta u n a$ を $k u n a$ と聞き取り、兀納 $k u n a$ として契丹人の名前に使用したということでしょう。そうすると、兀納 $k u n a$ を先の戈也昆墓誌（蕭仲恭墓誌）の墓主・蕭仲恭の父の名 $ku \text{ 𡗗 } ul \text{ 伏 } ni$ に当てたと説明することができます。これは即實氏に近い立場ですね。

中村：あるいは、兀の疑母 η は消失しており u であった。そして兀納 $u n a$ は $ku \text{ 𡗗 } ul \text{ 伏 } ni$ に当てた音訳漢字であったと想定することもできます。漢人は語頭に η -を持っていたが、契丹人は持っていなかった。したがって通常の契丹語の会話において用いられる漢語語彙はもちろんのこと、漢語の会話においても契丹人は疑母字をゼロ声母で発音したのではないかと想像します。同じ漢語語彙（役職名など）を契丹語の会話ではゼロ声母で、漢語の会話では η -で発音し分けるというのはあまりにも煩雑でしょうから。しかし、契丹小字で漢語語彙を表記する際には、いわば“正式な表記”として η -を用いたということではないでしょうか。その際、契丹小字に単音の η を表す文字はなく、 $e\eta$ や $i\eta$ を表す文字を語頭に置いて η -を表すことにしたのでしょうか。あたかも英語の $[v]$ を表すために、日本語で「ヴァージニア (Virginia)」や「ヴィーナス (Venus)」と表記するようなもので、会話音と表記に乖離があるように思えます。

吉池：契丹人が話す漢語ではゼロ声母であったが正式な表記として η -を用いたのではないかということですね。その“正式な表記”について思うところがあります。“役職名などの漢語”を碑文に刻すときに、記憶した漢語音を契丹小字で表記するのは大変な労力であり、また表記が一定しません。おそらく実際の作業としては、漢字音を表記した契丹小字と、役職名などに常用する漢字とを対照させた“正式な表記の対応表”が手控えとして作られており、それに拠って碑文の原案をつくり、刻工が石に刻したということはないでしょうか。類似の対応表は後代にあります。元代にはパスパ文字と漢字の対応表『蒙古字韻』があります。

²⁸ 契丹語の破裂音の対立を k と k^h と見るか、 g と k と見るかという立場の違いによる。

そのような契丹小字のバージョンが遼代に既に有ったと想定しても良いかもしれませんが。中村さんは『蒙古字韻』は韻書ではなく、パスパ字漢語を書く際のパスパ文字と漢語の対応表であると言っていましたね。

中村：韻書というのは押韻の規範を示すのが目的ですが、『蒙古字韻』はそのような意図では作られていません。漢語音を表記したパスパ文字と漢字との網羅的な対応表と言うべきものです。この種の表がなければ、皇帝聖旨などの漢語文を一定のパスパ文字つづりで表記することができません。果たして契丹小字の場合はどうでしょうか。パスパ文字はモンゴル語文を記すことも、漢語文を記すこともあった訳ですが、契丹小字で漢語の文章を綴った例は知られていません。契丹文の中に漢語語彙が現れるだけです。したがって、『蒙古字韻』のような網羅的な対応表は不要で、常用の漢語語彙を契丹小字で記した表があれば十分です。それでも、そのような対応表が役所で正式に作られた可能性は高いと思います。その際に、疑母を η - で記すことが定められたのでしょうか。

吉池：そうすると、契丹人にとって元はゼロ声母であったと考えてもよいということになります。

中村：元がゼロ声母であったと想定すると即實(1996)の議論は成り立たないのですが、そもそも蕭元納列傳の元納を戈也昆墓誌(蕭仲恭墓誌)の墓主・蕭仲恭の父の名に当てること自体が綱渡りのような危うい想定であり、その想定を仮に認めるとしたならばというところから出発した議論です。ㄨが u であったか ku であったかにより、僕と祿の入声韻尾-kの有無が決まるわけですが、いずれにしても、別の根拠がなければ何とも決めがたいというところでは。

吉池：大山鳴動して鼠一匹というか、鼠の影が一匹という議論でしたが、問題を一つずつ検討するしかありませんね。

中村：『契丹小字研究』(1985)で取り上げられた入声字については検討すべき点がまだまだ残っています。『契丹小字研究』に用例のない入声韻尾-p の検討もしなければなりません。今回はこれまでとしませんか。

吉池：愛新覺羅 烏拉熙春(2004)²⁹は、即實氏とは異なる観点からㄨが k 音を含むことを論じていますので、次回はこの論文の検討から始めることを提案します。今回はこれまでとしましょう。

【2020.6.24 一部訂正】

²⁹ 愛新覺羅 烏拉熙春(2004)「遼代漢語無入聲考」『立命館言語文化研究』16(1)、121-141頁。